

「江戸名所図屏風」と都市の華やぎ

出光美術館（東京・丸の内帝劇ビル9階） 2018.07.28～09.09

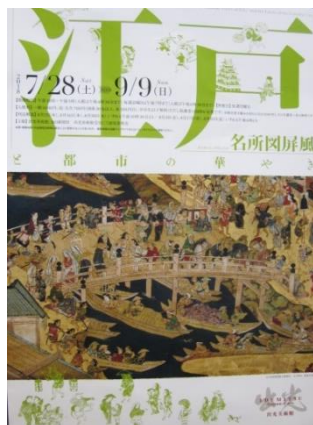
「江戸名所図屏風」は、俗にいう「寛永風俗画」の一例であり、その成立はその後の江戸での「風俗画」である「浮世絵」誕生を示すものであるとされる。

「屏風絵」は、17世紀前期の開府のころの都市「江戸」の様子や往時の人の往来や街の景観などを描いて、都市建設の途上で荒々しく活気ある江戸市街の様子を、町人たちの生活風俗とともに描かれている貴重な資料である。

江戸の町は、「徳川家康」の転封（てんぽう）（国替）と開府をきっかけに急速に発展し、その繁栄を捕らえた絵画の内の「江戸名所図屏風」は1657（明暦3）年の大火以前の様子を伝える貴重な作例で、画面にはさまざまな労働に勤しみ、歓楽街に集うなど日々の暮らしを謳歌する人たちの姿が豊かに描かれている。

本展では、2015年に「国の重要文化財」の指定を受けた作品を中心にして、「江戸」を題材とした都市図の数々の魅力を紹介する企画で開催されている。

《江戸名所図屏風》（右隻部分） 江戸時代・寛永期 紙本金地着色



重要文化財作品で、八曲一双図の右隻第7・8扇部分の屏風の中心部にあたり、画面の中央から下方にかけては、江戸の顔である「日本橋」のメインストリートに、高級商店の立ち並ぶ光景が描写されている。

橋上から通りを眺めると、人馬の往来が尋常ならざる様子もさることながら、あたりには大道芸人や露天商などが道行く人々の足を引き留める様子も見え、繁華な街のありふれた情景が、人々の喧噪の中に見事に再現されている作品である。

菱川師平 《春秋遊楽図屏風》（左隻） 江戸時代 重要美術品



江戸時代の浮世絵師（生没年不詳）の作品で、右双に「上野の花見」を左双に「吉原遊興」を描き分け、師匠「菱川師宣」の様式を塔襲した大作とされる。